

シンポジウム／昔話を聴き続けて

—『昔話採集家』・佐々木徳夫氏の半世紀から—

声を文字に換えること

川島 秀一

宮城県の佐々木徳夫は、その自伝的なエッセイ集である『われ成り成りて』の副題に「昔話採集家の人生手帖」と記している。同著の「著者略歴」にも自身のことを「昔話採集家・エッセイスト」と規定しているようである。

その『われ成り成りて』には、「昔話研究は伝承者の発見、昔話の採集に始まり、研究者は同時に採集者でなければならぬ⁽²⁾」という一文があることから、「昔話採集家」の内実は、「研究者」であり「採集者」であることを意味しているのかもしれない。

佐々木徳夫は、一九二九年に宮城県中田町（現登米市）で生まれている。父親が助役や町長を歴任していたという名望家であり、若いころから文字に親しむ環境で育ったようである⁽³⁾。佐々木は、『酒の三太郎』⁽⁴⁾（一九六六）から始まって、この四十年のあいだに、昔話集やエッセイなどの単著を四十二冊ほど発刊している。この『酒の三太郎』について、佐々木は次のように述べている。

『酒の三太郎』は語りを忠実に記録した五十話の昔話集で、例えば次郎は「じろう」と読まれるので、ずろう（次郎）とし、くずうりょう（九十両）、ねどこ（寝床）、しゃくしょう（百姓）、おぬがすま（鬼ヶ島）、しと（人）、こす（腰）、すんで（死んで）、おでら（お寺）というように、面倒でも発言どおりに書いて、漢字で説明した⁽⁵⁾。

つまり、昔話の語り手の発音に忠実に、それを五十音で表現しようと、ぎりぎりの表記の方法を選んだことになる。この表記を指導したのは、当時、宮城県白石市の図書館長であった菅野新一であり、佐々木の次の昔話集『むがす、むがす、あつとごぬ』⁽⁶⁾（一九六九）まで関わっていることは、この書を校訂したのが菅野新一であることから確認できる。そもそも、この標題からして、それが「昔、昔、あるところに」という昔話の語り始めの言葉を、宮城県の語り言葉として五十音で忠実に再現したものにはかならない。菅野は佐々木に対して、このような表記方法について助言をし続けた人であるが、『むがす、むがす、あつとごぬ』は八回も書き直しをしたという。昔話の語り言葉の不明な点は、再度、語り手に会って聞き直しをすることまで要求したという。

しかし、この語り言葉の忠実なる再現は、昔話採集におけるテープ・レコーダーの導入と無関係ではない。佐々木によると、『むがす、むがす、あつとごぬ』の採集は、ほとんどオープン・テープで行なったという。この書が発刊された一九六九年は、ちょ

うどカセット・テープが日常的に生活の中に定着していったころである。

それでは、先の『酒の三太郎』では、佐々木がどのようにして昔話を採集したかといえば、それは速記術であった。昔話は繰り返し言葉が多いので、自分で工夫をして速記をしていたという。

しかし、最近の佐々木の昔話集には、おそらく、「ずろう（次郎）」とか「しゃくしょう（百姓）」、「しと（人）」、「こす（腰）」、「すんで（死んで）」、「おでら（お寺）」などの表記は、漢字のみになっているはずである。昔話集を読む側からすれば、これは非常に読みやすくなってきたことに尽きるが、この表記上の変化が、いかなる理由によってなされたのかが興味がある。

おそらく、この表記の違いは、テレビジョンの普及による影響などによって、地元の言葉が使用されなくなったという語り手側の変化によるものだけではないだろうと思われる。たとえば、佐々木は、『われ成り成りて』の中で、「昔語りは言葉のリズム、言葉の音楽なのだと思った」⁽⁷⁾と記しているが、『酒の三太郎』や『われ成り成りて』などの初期の昔話集のような、括弧に漢字を組み入れた表記方法では、音読でも黙読でも、「言葉のリズム」を十分に堪能することはできないだろう。

この、佐々木徳夫という、一人の「昔話採集家」の昔話記録の歴史をたどるということは、この昔話採集家が、声を文字に換えるということに、いかに格闘してきたかを明らかにするこ

とに等しいものと思われる。

注

- (1) 佐々木徳夫『われ成り成りて』（佐々木徳夫ふるさとの会、二〇〇一）
 - (2) (1)と同じ。三六頁。
 - (3) 二〇〇五年十二月二十六日、高木史人・飯倉義之とともに、仙台市において佐々木徳夫にインタビューを行なった。
 - (4) 『酒の三太郎』（みちのく昔話研究会、一九六六）
 - (5) (1)と同じ。二六頁。
 - (6) 『むがす、むがす、あつとこぬ』（未来社、一九六九）
 - (7) (1)と同じ。三七頁。
- (かわしま・しゅういち／宮城教育大学非常勤講師)